勉強第一の大学生の生活実態調査に考える
～教えを学ぶとは

●「てんぷら」を食べながら考えた

毎日JPサイトでは、大学生協連の調査による「大学生の意識変化、人間関係より勉強重視、就職難を反映」を報じていました（2012年10月12日）。

バブル崩壊から20年間の大学生の生活実態の変化を分析して、大学進学率が1991年の25.1%から、2011年の51.0%に上昇、大学生活の重点を「勉強第一」とする回答が、同じくこの20年で19.9%から、27.1%と増加し1位となりますが、「豊かな人間関係」は、26.0%から、13.4%に半減したといいます。

そういえば、私はある大学の非常勤講師をしていますが、この頃の学生の出席率がだんだん高くなってきたと少し訝（いぶか）しく思っていたところでした。

この調査の分析班座長の武内清、敬愛大特任教授は、「就職難を肌で感じ、失敗が許されない時代に適応しようとまじめ化が進んでいる」と分析しています。つまり、就職のために勉強をし、就職のために授業に毎週出席するということになるのでしょうか?

私は、大学時代、聞きたい教授の授業が別の大学に開かれていたので、「てんぷら」学生になって、その教室にもぐりこんでいました。もっとも、今の学生は「勉強第一」でも、成績につながらないこんなことしませんね。それより、「てんぷら学生」という言葉はもう死語でしょうか?　また、昔は「毎週、私の授業に出てくるなんて碌な奴ではない」というような言い方をされる豪傑先生がおられましたが、今、就職第一主義の管理型の大学では問題発言になるのかもしれません。噫。

●何のために学ぶのか

もう、20年くらい前だったかと思いますが、ある仏教系大学の仏教学の教授が、今の日本の大学に不要な部門がある、それはアカデミズムと全く無関係の就職課だと喝破したことがありました。今、こんなことを言ったら笑止千万だと言われかねない状況があります。

こんな話も聞いたことがあります。これも仏教系大学の仏教学の教授が紹介してくれた四コマ漫画ですが、子どもが勉強しろ勉強しろという母親と次のような会話をするのです。

「なぜ勉強しなきゃいけないの?」
「いい学校に入り、いい会社に入るためよ」
「なぜいい会社に入らなきゃいけないの?」
「いい給料をもらい、部長や社長になるためよ」
「でも部長や社長になる頃は歳とって死んじゃうよ」
「社長になっていれば立派な葬式で沢山の花輪が集まるわよ」
「そうか今、勉強するのは、自分の葬式で沢山の花輪が集まるためなんだね」

この話を聞いたときは面白い漫画だなと思っていましたが、今やそれは笑えない事実として私たちの大学実態となっているのでしょうか。

以前、文化人類学者の上田紀行さんから、次のような話を聞きました。日本で大人が少女に「君何年生?」と聞いて、「中学3年生です」と答えがあると、「高校受験大変だね」と判で押したように同じことを言う。けれど、14歳の少女の関心事は受験だけなのだろうか?　たとえば、貧困や紛争や疫病で苦しんでいる世界の子どもたちを救うNGO活動に関心があってもおかしくないはずなのに、大人の常識的なものの見方が、その社会の関心のストライクゾーンを狭いものにしてしまっているという内容でしたが、印象深く心に残っています。それはそのまま、学生たちのものの見方に反映していくと思います。

さらに、岡山県の川崎医療福祉大学の佐々木正美教授が、その著『かわいがり子育て～3歳までは思いっきり甘えさせなさい』（2007年7月、大和書房）の副題にもあるように、親の愛情いっぱいの中で育てていくことの大事さを言われていましたが、同時に今の親は、ちょうど、雨の日に犬にレインコートを着せて散歩をさせるように、自分の都合を相手に押しつける、つまり自己愛の投影として子どもに接することが愛情であるかのように考え違いをしていることが多い、つまり過保護と過干渉は違うと指摘をされています。

私（1957年生）と同世代の坊守さんが、毎年訪ねている母校の大学祭で今年、中学生にしか見えない大学生たちが増えていたように感じたと話してくれました。確かに、大学が自分たちにとって何でもしてくれるレジャーランド化していき、また親御さんもそのように思って大学当局にかかわっている傾向があるようです。それは、「就職支援課」を作り、学生をお客さん扱いしている状況を見てもわかります。そのうち、病院が「患者さま」と呼ぶように、大学当局が「学生さま」と呼ぶようになるかもしれません。

●キタキツネの子育て

育てるということは、とても難しいことです。教育の分野では有名な話ですが、キタキツネの母親の子育ては、最初は子どもをなめるように優しく育てますが、ある時期がくると独り立ちをさせるために厳しく厳しく子どもを突き放して子離れをしていきます。これは人が子を育て、本当の学びや人間成長を完成していくことに重なります。

かつて家庭においては、祖父母の優しい愛情を目いっぱい受けながらも、同時に親が子を厳しく躾けることから、学びは始まりました。自分の座る場所にきちんと座り、家族が揃ってから一緒に手を合わせ食事を始める、履物は揃える、お客様がいらしたら子どもも必ず玄関に出て座ってご挨拶をする、こういうことを大切にして子は育ちました。

しかし、相手を育てるには、こちらも同じように厳しく身を処さなければ成り立ちません。ちょうど、刃物を研ぐには、研ぐ石そのものが削られていくのと同じです。そして、同時にどんなことがあっても相手を受け入れていく安らいの態度が不可欠です。

まさに、厳しさと安らぎの両方がうまく両立してこそ、人は育っていきます。

このことは、仏の教えに向き合い、「さとり」や「信心」が育つには、己の迷いの在り方を逃げ隠れることなく厳しく見つめていくことと、その己が大きな縁起（つながり）に生かされ、如来の慈悲の中に生きていると深く安らいの実感の中に育てられていくことと重なることだと思います。

なっていない自分を見つめることは大変つらいことですが、それなくして確かな人間成長はなかったように思います。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた!　第一水曜午後六時半の法話会「ナムの会」で『正信念仏偈』を、第三日曜午後六時半の「聖典勉強会」で『親鸞聖人御消息集』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と八月は休会し、十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります。「聖典勉強会」は八月と十二月は休会し、その他、行事によって休会があります。

国（国土）とどのように向き合うか
～仏性を踏みにじる私の発見

●聖徳太子というと

すぐに一万円札!と思い浮かべる貴方は、いつ福澤諭吉が一万円札に登場したか覚えていますか？　1984年で、もう四半世紀以上経過しています。染み付いたものは強いです。

聖徳太子（574～622）の遺した『天寿国繍帳』に、「世間虚仮唯仏是真」という言葉があります。国家、政治、朝廷の中心的人物だった太子が、この世間は相対的で、絶対的な価値はなく、それを目覚めさせる、唯仏のみぞ真であるという大胆な指摘です。

現代の話です。知り合いのご住職が、お寺の掲示板に、「古来人類の最大の迷信は国家崇拝なり」（水下尚江）という言葉を掲げると、いつの間にか赤いペンでそれに大きな×印がつけられていると語っておられました。主権者が、国民となって六十五年以上たっても、国家を巡り、何か深い思い込みが私たちの社会にはあるのでしょうか。

●「社会に関わらない仏教」「社会に関わる仏教」

同朋大学の尾畑文正先生が、『親鸞聖人の手紙から』（東本願寺出版部）に、仏教を学ぶのに、「社会に関わらない仏教」と「社会に関わる仏教」の流れがあるといわれます。

先ず、一方の代表例として、吉田兼好（生没年不詳）『徒然草』（1330年頃）の、

「仏道を願うというは、別の事なし。いとまある身になりて、世のことを心にかけぬを第一の道とす」

という文章を示されています。仏法の道理を願って生きるとは、時間のある身になって、社会の問題に関心を持たないことを第一義とするという訳です。また、もう一方の例として、親鸞聖人（1173～1263）の「手紙（消息）」を示されています。

「念仏をとどめられ候ひしが、世に曲事のおこり候ひしかば、それにつけても念仏をふかくたのみて、世のいのりに、こころを入れて、申しあはせたまふべし」

拙訳すれば、「（後鳥羽院が法然聖人を弾圧した承元の法難という）念仏を禁止されたことがありましたが（その14年後の1221年）、世間では（念仏禁止をした張本人の上皇たち［後鳥羽・土御門・順徳］が流罪になるという承久の乱という）混乱したあり得ない出来事が起こりましたから、そういう出来事につけても念仏を深く頼みとし、世の祈りを心に入れて、お互いに念仏すべきだと心得るとよろしいでしょう」となります。

尾畑先生は、この手紙の趣旨は、先ず、世間の価値である権力・地位財産・名誉家柄に頼る生き方を問い、唯念仏という仏教を頼みにしなさい、そして、だから孤立して生きるのではなく、「世のいのり」に、心を傾けて、念仏をしなさいというのです。「世のいのり」とは私に踏まれ、私に殺されている世界の叫びだと言われます。

●世のいのり～私が踏みにじっている仏性ある世界

インド以来、仏教は「さとり」や「信心」という宗教体験に立つと、あらゆる有情、感情あるものに仏性、つまり成仏していく可能性が見えてくると説きます。これが、中国に伝わると草木礫塵各一仏性といい、非情、感情のない物質の成仏を説きます。さらに日本に伝わると草木国土悉皆成仏などといい、国土まで成仏の可能性があるといいます。これは最澄様や空海様、そして鎌倉時代の祖師方もお使いになる言葉です。

さとる可能性ありとは、今は迷っていることです。国土とは、領土という意味ではなく、社会、世間のことで、とても深いものの見方です。迷いの私たちが作り上げている社会が迷っているから、その国土を成仏というあるべき理想に向けて生きていこうと説くのです。

福島県大玉村、鈴木博之氏は、放射能で農地が汚染され農産物が売れないので銀行に融資を受けるため罹災証明が必要となります。村に、県に、国（内閣府）に行きますが、土壌汚染の証明が出ない事実に直面します。交通事故証明は警察からでますが、放射能汚染はどこからも出ません。理由は、国に放射能を汚染物質として規制する法律がないからです。「放射能による汚染」を汚染としては認めていないのは、放射能は危険物質でないからでした（2011年12月4日放送、NHK-ETV特集「原発事故に立ち向かうコメ農家」）。私は驚き、また国も迷いを抱えていると思い当たりました。

歴史の中で、仏教者が仏教の本質を見失い、世間や民族宗教を基にした原理に右往左往し、体制や支配者に屈して、世間の原理を手放しに認め、仏教は社会の問題とは関わらない、一人ひとりの心の中の問題だという教学を作りました。

それは人間と社会の迷いの原理を見つめ問いにすることもなく、遂には、世間の迷いを、認め率先して進める教学ともなりました。浄土真宗でも、差別を認めたり、戦争を擁護し扇動する教学がありました。反対した人もいましたが、多くは仏教者であるといいながら仏教の本質に迫る生き方がまったく成り立たっていなかったことになります。

過ちを犯す国を暴走させないように人間の知恵が規定し制限したのが憲法です。神国日本は負けないと嘘をついて人びとに塗炭の苦しみを強いた国に、戦争をしないで国を運営しなさいと、国民を守っている訳です。仏性は、さらに積極的に相手を認める生き方を展開します。「世のいのり」に心を入れるとは、あらゆるものの仏性を見つめることだと思います。私が、それを無視し、踏みにじっていると自覚させられたのが次の言葉です。

「念仏を御こころにいれてつねに申して、念仏そしらんひとびと、この世・のちの世までのことを、いのりあはせたまふべく候ふ。（中略）ただひがう（ひごう）たる世のひとびとをいのり、弥陀の御ちかひにいれとおぼしめしあはば、仏の御恩を報じまゐらせたまふになり候ふべし」親鸞聖人お手紙

拙訳すると、「念仏をお心に入れて恒に申して、念仏の悪口する人びとの、この世と後の世までのことを、祈ってください。（中略）そして間違った考え方にとらわれた（非業たる）世の人びとが阿弥陀仏の御誓いを仰ぐ身になるように、と考え合わせてくださるなら、それは必ずや仏のご恩に報いることになるでしょう」となります。

怨みに怨みで報いるのではない生き方、つまり相手を批判し裁くだけに終わらない深い生き方を仏性は教えてくれます。お互いの迷いを見つめ、真実への歩みを始める。そこに、国とは、社会とは、それに対して私はどう生きているか。草木の中にすらまします仏性を見つめる教えが「社会と関わる仏教」だと思えてきました。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後六時半の法話会「ナムの会」で『正信念仏偈』を、第三日曜午後六時半の「聖典勉強会」で『親鸞聖人御消息集』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。

「ナムの会」は一月と八月は休会し、十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります。「聖典勉強会」は八月と十二月は休会し、その他、行事によって休会があります。

結果を出す？
～道を歩むこと（プロセス）と到達すること（ゴール）

●「結果を出す」？

ストーブ・リーグの話題といえば、選手たちの去就（きょしゅう）です。

あの大型新人（ルーキー）を狙う各球団の契約金とか、その内野手は打率が何割になったとか、この投手はセーブ数がいくつだとか、どの外野手は何億円（ドル?）プレーヤーとか。

いずれも世間の耳目（じもく）を驚かせるような大きな数字で評価が語られます。

そのせいか何年か前から、野球に限らずスポーツ選手の功績を「結果が出た」とか、「結果が出ない」という表現で呼ぶことが当たり前になってきましたね?

読売巨人軍やニューヨーク・ヤンキースなどで活躍した元プロ野球選手、松井秀喜氏の引退会見の記事にも、

> 「今年、マイナーからスタートしてメジャーに上がり、試合に出る時はクリーンアップで出させていただいたにも関わらず、結果がふるわなかった。そのことが一番大きな要因。命がけでプレーし、力を発揮するという気持ちで一〇年間やってきたが、結果が出なくなった。ここで一つの終わりを迎えたんだと思う」（サンケイスポーツ、2012/12/28）

と、この言葉のある部分が使われていました。しかし、松井氏らしく丁寧な表現でした。

流行語に振り回される私ですが、この言い回しは、それこそ生理的にダメです。「自分にとって都合のよい」結果が出たか、あるいは、「自分にとって都合のよい」結果が出なかったということを言っている訳ですが、その言葉遣いは、自分の都合だけしか関心のない発想から生まれています。私も都合で物事を考えてしまいますが、だからといってこの言葉は受け容れられない使い方であり、言い回しです。

●道（プロセス）を歩むことは、そのまま到達すること

「結果が出ない」とは言い換えたら、自分はきちんとした精進努力を行っていなかったということです。しかし、お互い自分を見つめるのは辛いので、都合の悪いプロセスは無視して「結果が出ない」と言ってしまうのです。だからといって、ゴールだけを望むのは足元を見失っている生き方だと思いませんか。

仏教では現実の人間の迷いの姿を教える一方で、人間の到達すべき「さとり」という理想への歩みの道を教えます。

まず、現実の迷いを地獄（じごく）・餓鬼（がき）・畜生（ちくしょう）・阿修羅（あしゅら）・人間・天上と示し、私たちは六道輪廻（ろくどうりんね）、つまり六つの迷いの生き方をしているといいます。

特に、地獄（怒り）・餓鬼（貪り）・畜生（愚痴）を三塗（さんず）、三悪道ともいいます。三塗の塗は、途中の途の字に通じ、どちらも今、自分が歩んでいる道、人生のプロセスのことです（※三途の川とは、これから作られた言葉ですが、インドの仏教思想に「三途の川」はありません。また三塗とは、冥土にあって渡っていく川という意味でもありません）。

あるいは三悪趣（あくしゅ）ともいい、今、三悪道というプロセスを歩んでいることが、やがて結果として趣（おもむ）くべき世界、ゴールに重なっていると示すのです。つまり、地獄（都合の悪いものに腹を立て）、餓鬼（都合のよいものなら貪り）、畜生（物事の知り方を病んでいる）という今の迷いのプロセスは、そのままこの私が到達する世界のあり方、行く先、ゴールそのものとなっているというものの見方です。

それはまた、到達すべき理想、「さとり」への歩みを勧めるときも同じように、今の私の歩み、プロセス、修行の実践が、道理に適（かな）っているならば、そのまま私の到達していく「さとり」そのものと重なり、成就、完成していると教えるのです。

これを道元禅師は「修証不二（しゅしょうふに）」といい只管打坐（しかんだざ）という座禅の修行と証（さと）り体験は二つのことではないといわれ、親鸞聖人は「行即信（ぎょうそくしん）」といい称名念仏（しょうみょう）という行（ぎょう）を離れたならば、真実の宗教体験である心澄浄（しんちょうじょう）（信心）はどこにもないといわれます。

結果が出るも、出ないも、すべて今ここで私がどう行道を歩んでいるのか、しかもその実践が到達すべき道理に適った歩みとなっているかどうかがいつも問われています。

●プロセスを語る深さ、語らないと見えない落とし穴

2012年、アカデミー作品賞にノミネートの可能性のある、『ジャンゴ　繋がれざるもの』と『リンカーン／秘密の書』という興味深い映画があります（2012/12/28現時点）。

『ジャンゴ』は、アフリカからアメリカに奴隷として強制連行された黒人たちに対して行われた、想像を絶する過酷な差別、人権侵害、リンチと、それからの解放を描いた映画です。たぶん、アメリカの文芸や映画など大衆文化の中で、『ジャンゴ』ほど正面から奴隷制度と黒人リンチを取り上げたものはないでしょう。もちろん、ビリー・ホリディの『奇妙な果実』はジャズの歌曲では有名なプロテストソングですが認知度は低いです。

『リンカーン』は、黒人差別撤廃の南北戦争に勝ち、大統領にもなった人物を想定して作られた3Dアクション映画です。一般に、リンカーンは奴隷解放の父と呼ばれましたが、ネイティブアメリカンに対しては一貫して徹底排除を訴え、民族浄化の大量虐殺の指揮を続け“インディアン狩り”をしました。また、彼は白人と黒人が平等であるとは決して考えていませんでした。しかし、『リンカーン』のような作為的な映画の情報だけなら、多くの人は、その結果（ゴール）だけを評価し、“偉人”と受けとめてしまうと思いました。

人は何をしてきたかというプロセスと向き合うのは、とても辛く、多くの人びとには受け容れがたいものでしょう。しかし、それを掘り起こす営みが人を耕してきたのだと思うのは、私が農耕型の文化に育ったせいでしょうか。報道は次のようにも伝えています。

> 松井氏は引退会見で「感謝してもし尽くせない」と長嶋氏への感謝の言葉を口にし、野球人生で一番の思い出を尋ねられると「長嶋監督と二人で素振りした時間」と答えた。長嶋氏も松井氏の思いに応え、「二人きりで毎日続けた素振りの音が耳に残っている」（スポーツニッポン、2012/12/28）

結果が出るとか出ないというモノの見方を超えたミスター・ジャイアンツ（現・読売巨人軍終身名誉監督、長嶋茂雄氏）の言葉は松井氏の感謝の思いと重なり、素振りのバットの音と共に鮮やかに心に響きます。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後六時半の法話会「ナムの会」で『正信念仏偈』を、第三日曜午後六時半の「聖典勉強会」で『親鸞聖人御消息集』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と八月は休会し、十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります。「聖典勉強会」は八月と十二月は休会し、その他、行事によって休会があります。

亡き人と私
～姿勢が変わると見え方は変わる

●亡き人の夢

　お寺の法座にお参りしたことのなかった門徒さんがある寺に尋ねてきて、
「最近、毎朝亡くなった女房の夢を見る」
　というのだそうです。長年連れ添った妻だけれど気になるので八卦見（はっけみ）に見て貰ったら、
「行くべき所へ行けずに迷っている。お寺に行ってお経を読んで貰いなさい」
　といわれたといいます。
　寺の住職は、その男性とゆっくり話がしたかったのだそうですが急に来たので、他の約束の時間になってしまいました。するとその男性は、お布施を差し出して、後でお経を読んでおいてほしいとだけいい、住職の話も聞かず帰ったそうです。数日後、二人が町で、ばったり出会うと男性はぺこりとお辞儀をして言いました。
「お陰であれからすっかり出なくなりました」
　と頭を上げました。すると、その顔を見て住職は思い出したように、
「ああ、お経を読むのを忘れていた」
　という笑い話のような実話があるそうです。
　夢にまで出てくるといって、身近な人のことをいぶかしく思う心が生まれるのも、私たちのあり様です。しかしまた一方で、親しい人との死別の悲しみ寂しさの気持ちから、せめて、夢の中にでも出てきてほしい、夢でもいいから会いたい、という言葉も聞いたことがあります。

●仏に出遇えたキサー・ゴータミー

　昔、インドで、キサー（やせっぽちの）・ゴータミーと呼ばれた女性に次のような逸話があります。子どもに恵まれた喜びも束の間、幼子は病で亡くなりました。わが子の死を明らかに見つめることのできぬ深い寂寥感（せきりょうかん）。彼女は、遺骸を抱いて町を彷徨（さまよ）っていましたが、仏弟子の勧めにより、祇園精舎（ぎおんしょうじゃ）を訪ね、わが子を生き返らせたいという思いから、お釈迦さまの教えに耳を傾けました。
　お釈迦さまは、町に行って芥子粒（けしつぶ）を貰ってくれば子どもを救う薬を作ろうといわれます。しかしながら、ただ誰も死人を出したことのない家で貰うのだと制限をお付けになります。
　なぜか理由は分からぬまま、急ぎ町に出かけ、芥子粒を求めました。どの家も分けてくれようとしますが、葬式を出したことのない家は見つかりません。ゴータミーは、夕方まで歩き回り、疲れ果て、ふっと大切なことに気づいて、鳥肌の立つような戦慄を覚えました。生まれて死なぬ者はいないこと、出会った者はいつか必ず別れる時が来ること、そして自分自身も死を免れないこと。
　遺骸を葬ったゴータミーは、釈尊の元に帰り、み教えによって夢から目覚めたことを申し上げ、真実を求める眼が開かれた今、お弟子に加えていただいたといいます。
　人は親しい人の死を、先ず拒絶し、悲しみますが、真実（まこと）の教えに出遇い、それにより気づかされ、目覚めることで、自分と回りの人に対する本来の関わり方に導かれ、お互いのあるがままを受け容れ、認め合う生き方に育てられることがあります。

●すくわれるということ

　寺に育ち、寺に暮らし、今、僧籍を頂いているせいかも知れないけれど、と前置きしながら、連れ合いは、親しい人を亡くした人から次のような問いを受けることが度々あるといいます。
「亡くなった人はどうしているんでしょうか?」
　それに対して、こう答えているといいます。
「あなたが本当に救われることが、亡き人が救われることですよ」
　これでいいのかしら、と尋ねられました。私は、積極的な肯定も否定もできません。その時、その相手との関係で、言葉の使い方やその人の表情は変わるものです。
　ゴータミーに対して、お釈迦さまは、この世は諸行無常ですよ、生まれたものは死にます、出会った者はいつか別れます、分かりますか、などという道理の言葉を伝えた訳ではありませんでした。その人の身を以て肯けるようなプロセスを歩ませる方法を示したのだと思います。もし、道理を理屈だけで伝えたら、ゴータミーは、この釈尊という人は話の分からない人だと言って立ち去り、私たちに大切なことを考えさせてくれるような逸話は生まれなかったかもしれません。
　さて、世間の立場で考える救いとは、救う仏様が向こうにいて、救われる私がこちらにいて、この二つの関係で救いが成り立っていくと受けとめているようです。
　ところが、仏教の救いをインドに遡ると、その一つにウッタラナという言葉があり、横切る、超えるという意味になります。それを中国で済度とも訳しました。済も度も、どちらも、わたるという字です。仏教の救いとは、色々な難しい状況、困難な障害を超え、わたることが出来るようになることです。世間でいうような、誰かの力に任せて、自分は何も変わらないということでは、決してありません。
　教えに出遇い、求め、学び、それが勧める日々の実践をするというプロセスを通して、仏教的な人生態度に向かって人格成長をしていくことです。そのことで、今までわたれないような苦しい出来事、厳しい現実をわたり、超えることを仏教では救いというわけです。
　そのような仏教的な生き方を育てることを仏教の各お祖師様がたは教えているのです。

　先のお話で、迷っているのは亡くなった方ではなく、生きている人間であるのは言うまでもないことでしょう。ところが、亡き人との関係を自分の都合で偏って見つめているときに、自分は迷っていないと思いこんでいるようです。そのような態度の時には、自分は思い込みをしているのではないだろうかという問いを持つこともなく、亡き人のために何かをしてあげるという考えが生まれます。しかし、教えにあい実践を通すことで、その姿勢が、迷いそのものだったと気づかされていく仏教的な人生態度が生まれてくるのです。
　亡くなった人が浮かばれないといいますが、本当はそのようにしか受けとめられないでいる生きている人間自身が浮かばれていない生活をしているのではないだろうか、と自分の言葉遣いやあり方を見つめるところに、亡き人を仏と仰ぐ私が育てられるようです。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後六時半の法話会「ナムの会」で『正信念仏偈』を、第三日曜午後六時半の「聖典勉強会」で『親鸞聖人御消息集』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と八月は休会し、十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります。「聖典勉強会」は八月と十二月は休会し、その他、行事によって休会があります。

国防色ってどんな色
～何をしたか、しなかったか

●ジャイアンとスネ夫

ジャイアンは、テレビアニメ『ドラえもん』に登場する腕白なガキ大将です。

ジャイアンがそうだというのではありませんが、ガキ大将が、弱虫をやっつけに出かけるときに、スネ夫のような立場の子分に向かって、「今、あいつをやっつけておかないとあとでひどい目にあうんだぜ。だからこれは、俺たちを守るための正しい喧嘩なんだからな」って言ったとしたら、「そうですよね。これこそ、僕たち仲間同士の約束でしたよね。集団的自衛権の発動ですよね。（スリスリ〈手を合わせてすり寄る擬態語〉）」とスネ夫は言うのでしょうか。

ルポライターの鎌田慧さんは、2013年1月15日付の東京新聞「本音のコラム――最初の戦死者は誰か」で次のように述べています。

> その世界一強い軍隊と一緒に戦争をするのが、いま安倍普三首相がやりたがっている「集団的自衛権」行使である。自分の国に関係のない戦争にでも、約束に応じて、出かけていくことになりかねないのだから、「集団的攻撃義務」というほうがより正確だ。けんかに強い男の尻馬に乗って相手を攻撃するなど、わたしのもっともしたくないことである。「助っ人」するなら弱い者にすべきで、強い者に加勢するのは卑怯な迎合である。「集団的いじめ」そのものだ。「集団的自衛権」は、日本側が考えたことではなく、米国側の要請である。先方は十分ひとりでも戦えるのだが、経費削減と孤立化を防ぐため、「同盟国」に下請けさせるという屈辱である。

スネ夫には、ジャイアンがやろうとしていることを止めるようなルールがあるのでしょうか?

日本では、自衛隊がアメリカとともに戦争に参加するために出かけることを可能にするために、「日本国憲法」というルールを改変しようという動きがあります。

●国防色って「戦争憲法」な色

「国防色」という言葉を聞くと「古いな」と感じるのは、私たちの年代（1950～60年代生まれ）ぐらいまでで、それよりも若い世代は聞いたこともなく育ったかもしれません。「国防色」「国防服」「国防婦人会」などという、それこそ古色蒼然とした言葉が、いつの間にかマスメディアを通して、大きな声でやかましく言い立てられるようになりました。

そうです、首相から発せられた「国防軍」という言葉が、報道の世界を闊歩し始めたのです。

安倍晋三首相（58）は、「憲法改正により、自衛隊を国防軍として位置づけます」と言い、「次期衆院選で憲法改変を争点にすると意向を示し」、憲法九六条には、憲法を変えるために衆参両院共に三分の二以上の発議が要件となっていることを、「たった三分の一を超える国会議員の反対で発議できないのはおかしい。そういう（改憲に消極的な）横柄な議員には退場してもらう選挙を行うべきだ」と述べています（産経ニュース、2012年9月30日）。

たとえばサッカーなど、スポーツには必ずルールがあり、そのルールを試合で遵守させるのが審判です。

2012年11月にタイ・バンコクで行われた、サッカーのタイ協会杯決勝で主審を務めた日本の吉田寿光さん（49）は、八百長の誘いを断わりました。ルールとは、選手たちが試合を進めるのに不利益のないようにするため、選手のために作られたものです。一方の側が自分にとって有利なものに変えたとしたら、それは身勝手で、許されざる暴挙です。

国民（主権者）が国家を運営していくときに、権力（権とは仮の意）が暴走して国民に不利益を与えないように決められているルールが、近代国家で定められている憲法です。国民が守らなければならないのが法律ですが、国家の権力に関わる公務員が国民の権利を侵害しないために守らなければならないのが憲法です。

憲法99条は「天皇又は摂政及び国務大臣、国会議員、裁判官その他の公務員は、この憲法を尊重し擁護する義務を負う」と明記されています。ここでは、憲法とは、国民から国家権力に守らせるルールだということがよく分かります。

しかし、今、首相は自ら、自分の都合のよいように、つまり、国会の議決数や、戦争が出来る国家にする方向に進めるために、ルールを無視して曲げようとしています。

「集団的自衛権」や、「国防軍」は、いずれも日本が交戦権を行使できるようになることを望んでの発言であり、主張です。交戦権を行使するようになるというのは、国民に戦闘で人殺しをさせることであり、戦闘で戦死者が出るということを明確に意味します。戦争で「人を殺さない、人に殺されない」という「平和憲法」の色合いを終わらせようとしています。

●何をしたか、と同時に、何をしなかったのか、が問われている

お釈迦さまは、「人はすべて暴力におびえる。すべての者にとって生命は愛しい。わが身にひきあてて殺してはならない。殺させてはならない」（法句経）と言われます。

ところが、1930年からアジア太平洋を巻き込む昭和の十五年戦争の時、現在私が所属する浄土真宗本願寺派は積極的に戦争協力をしました。宗祖親鸞聖人の教えを曲げ、天皇が始めた戦争だから聖戦であり、戦闘することは菩薩行、信心がなくとも戦死すれば往生するといい、門信徒を戦地に向かわせ、戦争に協力することが仏教徒の道だと明言しました。

「真宗の信仰もまた、その信仰を挙げて天皇に帰一し奉るのである。一声の念仏を称うるにしても、その念仏にこもる力を挙げて、上御一人（天皇）に奉仕している」と発言した僧侶は、戦後、龍谷大学名誉教授、本願寺派教学の最高学府勧学寮の一人になりました。戦争を聖戦として、「善なるものを救済せんが為には殺生といふこともその方法の一として採用して然るべき」と論じた僧侶も戦後、龍谷大学で教鞭をとっていました。1937年1月に、門主は伊勢神宮を公式参拝し、1940年に勧学寮は、伊勢神宮の大麻拝受を「宗義上差し支えなきものと存候也」と認定しました。

1977年、「宗門は戦中戦後を通じて相当の期間、多くの困難や障害を経験したわけであります。（中略）変動の時代を体験したのでありますが、その体験を通して深く感じましたのは、政治の方向がどのように変ろうとも、社会の制度がどのように動こうとも、浄土真宗の御法義の根本には、いささかのゆるぎもないことで、時と所とにかかわらずその真価を発揮する浄土真宗は、まことに尊くありがたく、聖人が真実の教えとお喜びになったお気持も、さこそと味わわせていただくのであります」と宗門の代表は述べました。

戦争中と戦後の教団の仏教徒が何をして、何をしなかったかを教えられます。今、原発に対して教団の内局はどのような発言をしているか、憲法改変に教学的立場の人びとはどのような発言をしているか。それを見届け、釈尊、そして宗祖の教えにかなう発言をすることが、国防色に染まる時代の中で、仏教者として生きる私の「しるし」です。

もちろん、何が「美しい国、ニッポン」かどうかと決めるのは仏教に育てられたあなたであり、美しさとは、人に押しつけられることでは、さらさらありませんね。

親鸞聖人は強い側に立つのでなく、支配される側、虐げられる側に自分が立っていました。仏教を学ぶ人の中に、支配する側、権力を持つ側にいる人とも、共に歩もうとする願いが生まれることを菩提心といいます。

合掌

万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後六時半の法話会「ナムの会」で『正信念仏偈』を、第三日曜午後六時半の「聖典勉強会」で『親鸞聖人御消息集』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。

「ナムの会」は一月と八月は休会し、十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります。「聖典勉強会」は八月と十二月は休会し、その他、行事によって休会があります。

思い込みの罪
～報道と私たち

●あなたはオリンピック東京開催賛成?

2013年3月2日、東京新聞に、中野区男性から、オリンピック2020東京開催賛成多数を疑問視する投書がありました。

回覧板署名だと個人自由意志が損なわれるので、賛成の人は店舗に用意された用紙に署名を呼びかけると一人もいなかったといいます。男性いわく、「東京の招致委員会が1月に電話で都民に行った世論調査では『招致に賛成』が73%に達したという。方法が違うので何とも言えないが、約500人いる私たちの町会のうち350人以上が、都民約1300万人のうち約950万人が賛成した計算になる。本当か?」

2018冬季オリンピックが韓国で開催決定されたことを知っている都民はどれくらいいるでしょうか。知っていれば、2年後に同じ東アジアの東京でオリンピックが開催される確率は極めて低いことは容易に想像できます。しかし問題は、多額の税金を使ってまで関係者が招致をしようとしているのはいったいなぜなのかと、一人ひとりが考えられるような公正な情報がまるで報道されていないことです。

体制権力や既得権益によって、主権者がその権利を侵されないように自由な立場で、しかも主権者の側に立ってなされるものが報道です。しかし、経済原理というスポンサーの影響で、むしろ主権者の知る権利を守っているとはいえないものになりつつあります。

知り合いの住職が、「『アベノミクス』と騒いでいるけど、消費税増税のシナリオだと見え見えなのに、一体どうなっているんだろうね」と言われていました。

私たちは、本質に迫る道筋や方法を知りながら、一方で安易に眼の前に大量に流される情報により、自分の思考に大きな影響を受けているようです。圧力はかけていないと安倍晋三国首相も主張している「従軍慰安婦NHK番組改編問題」2001でも、主権者の権益が守られているかどうかという報道問題が問われたために、大きな話題になりました。

●報道による自由意志の閉塞性

この数年、傷害や殺人などの事件が起きたとき、とくにテレビニュースでは、事件の傍観者である市民の声を合わせて報道することがよくあります。しかもそれは、犯罪事件が起きると、まるで皆がそう思っているかのような印象を与えています。

多くの場合、「犯人が早く捕まるといいと思う」という声とモザイクの映像が流れます。確かに、犯人が早く捕まれば、その事件の問題解決につながったり、また、同じ犯人によって起こるかもしれない事件を未然に回避できるかのような思いになりますから、安心できた気持ちになれるのでしょう。

しかし、「このような犯人を生み出した社会の抱える構造的な原因や、私たちの社会の諸問題を早く解決しなければならないと思う」というような発想や、そういうものの見方につながる発言を、報道が紹介したことをあまり聞いたことはありません。ずいぶん前に、犯罪事件でなく、ハンター同士の誤射殺を防ぐために迷彩色を黄緑色系から青紺色系に変えた報道の時、アナウンサーが「それでも動物のいのちが殺されることに変わりはありません」とコメントしたのを聞いたとき、とても印象深く受けとめました。

事件の背景を見つめることを同時代の人々は全く考えていないのでしょうか。私にはそうは思えません、なぜならば、先の新聞投書をされる方がたのように、表層に現れた報道には納得しない姿勢や、さらにこのアナウンサーのように問題を深い所で考えようとする人びとの意見は、決して多くはないにしても確実にあると思います。しかしながら、テレビなどの報道番組の制作現場ではそれが無視されているような気がします。そして、多くの場合、多数の意見として提供される発言や見方が影響力をもってしまうように思います。

●仏教と社会との関わり

釈尊の教えは、私たちが古い殻を脱皮し、仏に成長する、つまり、解脱(げだつ)と成仏(じょうぶつ)の道を示します。「教」えを聞き、その実践「行」を繰り返し身にすることで、古い私がだんだんとうち捨てられ、新しく教えに育てられた仏教的な人格主体が確立され、「証」が開かれていきます。

人間を変革成長させる仏教的生き方は、社会に対して何か影響力を持つのでしょうか?

確かに、仏教は自分の心を深く見つめるもので、直ぐには社会に影響しない側面があります。しかし、一方で仏教は社会に関わりました。但し日本の場合、多くの仏教者や教団は、「体制社会の本質を問いにしない」形でのみ、仏教的な人生態度を説いてきました。

つまり日本仏教が社会に関わる場合、体制や政治権力をそのまま容認し支えたままで社会実践をしました。例えば、国家主義的翼賛会賛同の戦争協力、あるいは差別容認のハンセン病隔離行政支持など、問題を温存助長した社会への関わりだということです。

実は、とても感動した仏教逸話にも、私の気づかない落とし穴がありました。「昔、飢饉で人々が苦しんでいた時、ある寺に乞食が食物を求めてきました。寺にも食がないので、ある師匠が仏像を作るための材料を取り出し、これを売って食を求めるよう乞食に渡しました。それを知った弟子が大きな罪だというと、師匠は仏の心なら飢えている人のため、たとえ手足や自分をちぎっても助けるものだ。自分は今、仏の心を実践したのだ」、という話です。仏さまの深いお慈悲の心をよく実践する実話です。

しかし、それほど深く仏教を生きるその師匠の書には、そうした生活困窮者が巷にあふれてくる社会の抱える現実や、そうした体制国家の問題点に対して、仏教を生きるものがどのように考えるべきかという視点がまったく触れられていないだけでなく、そうした政治体制を無条件に肯定する論理が貫かれている、と指摘されて私はとしました。(1983年10月　日本仏教社会福祉学会年報十四号　信楽峻麿『仏教者の社会的役割』参照)

今日、さまざまな社会的な弱者と言われる人びとが生まれてくる社会のありようを見つめたり、またそのような貧しく苦しい人びとの生まれない社会を生み出すということに触れないで、その時代の政治体制や権力をそのまま容認し、協力するような主張を続けるならば、今まで日本仏教が忘れていた問題をそのままにしているということになります。

聖徳太子は、世間虚仮唯仏是真(せけんこけゆいぶつぜしん)と示されました。真宗の祖師親鸞聖人は、国王不礼・神祇不拝(ふらいじんぎ)の立場を貫かれました。私も仏教を大切にして、人間の迷いが作り上げた世間を虚仮だと見届ける、確かな仏さまの智慧の世界に心を樹(た)てたいと思います。そして、人びとと共に歩む仏さまの慈悲という仏教的な人生態度を生きていきたいと思います。

仏教的な生き方に遥かに遠い私ですが、教えに出遇えたということは、私自身と私たちの作り出している迷いの社会を見つめる智慧を求め、完全には出来ないながらも人びとの悩みや苦しみを救う慈悲を生きることでしょう。そして、仏教を生きる私が社会と関わるとは、「体制社会の本質を問いにする」形で問いを持ち続けることだと思います。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳(本多 靜芳)

※ご縁のあったあなた!　第一水曜午後六時半の法話会「ナムの会」で『正信念仏偈』を、第三日曜午後六時半の「聖典勉強会」で『親鸞聖人御消息集』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます(会費はいずれも資料・茶菓代として千円です)。
「ナムの会」は一月と八月は休会し、十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります。「聖典勉強会」は八月と十二月は休会し、その他、行事によって休会があります。

いのちは支え支えられ合う
～水平の関係

●寒いなか、美味しかった築地本願寺のスープ

築地本願寺（2012年変更後の名称）は2011年3月11日の夜に帰宅困難者を受け入れ、温かいスープとおにぎりを炊き出しとして提供して話題になりました。

当日、私は、羽田空港に午後3時10分到着予定の飛行機で帰京しましたが、都内の交通は大混乱でした。

たまたま、築地本願寺に用事があったため、車で3時間をかけて辿り着きました。平常時の六倍の時間を要しました。そして、その晩は築地本願寺で仮眠をとることになりました。

同年3月24日付『週刊新潮』では次のように報道したそうです。

> 築地本願寺は震災当日、仮本堂と斎場（蓮華殿と伝道会館?）を緊急避難所として開放し、噂を聞きつけたサラリーマンが殺到した。そこでは寸銅鍋一杯にオニオンスープを温め、発泡スチロール製丼に入れ振舞った。「寒いなか、これが美味しくてね」（駆けつけた電機メーカー社員）。さらに、ホカホカのおにぎりもあり、足りなくなると追加の炊き出しもあった。同寺によると、地震直後に四〇人の職員総出で炊き出しの準備を行い、翌日午前中に全員が帰った後は、すぐに僧侶たちがバスに乗り込み、茨城に救援物資を持って向かった（以上抄出）。

困難な出来事が起きたとき、困難な立場の人も、そうでない立場の人も、助け合うことを深いところで願い求めているように思えてなりません。

●転倒した「いのち」の価値づけ

以下、MSN産経ニュース、2013年4月9日(火)7時55分配信の記事「朝鮮学校不配を撤回　町田市教委　新入生に防犯ブザー」から抄出しました。

> 東京都町田市教育委員会が市内の西東京朝鮮第二幼初級学校の新入生への防犯ブザー配布を取りやめた問題で、市教委は8日、決定を撤回し、防犯ブザーを送付した。
>
> 同校から2013年度分の配布希望が寄せられたが、北朝鮮のミサイル発射などで日朝関係が緊張する中、市教委は「社会情勢を考え」配布を見送った。
>
> この決定に、『政治と子供は関係ない』などの意見が市に相次いで寄せられ、市教委は8日、委員協議を開催し、『教育委員会の判断は社会情勢のみを理由に行うものではない』『子供の安全を守るのも教育委員会の役割』との意見があり、配布を決めた。

この「防犯ブザー朝鮮学校不配」と読んだ時、まず、「逆じゃないの?!」と、本当に自分の目を疑いました。なぜかというとその時の私の心の動きは、むしろ次のようなことでした。

朝鮮学校に通っている生徒たちは、北朝鮮に関わる出来事が起きるたび、人権意識の学びのない日本人の標的にされ、チマやチョゴリを切られるなどの事件が起きていることから、防犯ブザーを配布するのは当然だと思いました。それだけでなく、もっとさまざまな側面から日本政府や地方自治体、そして地域社会をあげて朝鮮学校の生徒たちを守ることこそ、日朝関係のよりよいあり方につながるのではないかという思いが生まれました。

●仏教的人生態度において支援するとは?

私が関わる「アーユス仏教国際協力ネットワーク」という仏教NGOは、仏教の精神をもとに平和と人権を大切にするさまざまな活動をしています。

その活動の一つとして、東アジアの未来の平和を願って、98年から「KOREAこどもキャンペーン」に参加しています。初めは、北朝鮮の洪水被害による食料危機に援助を行い、その後も必要に応じて食料・医療援助、太陽光パネル設置に協力しています。直接的には、物資の支援が数字や形に表れる大切さですが、実は、それは同時に、「南北コリアと日本のともだち展」などの活動を通して、日朝関係が複雑ななかでも、日本に住む子どもたちの平壌訪問を通して、顔と顔の見える関係作りが生まれることなのです。

それ以外にも、世界の各地での支援を続け、実際に現地に行くスタッフもいれば、反対に、現地のNGOの日本国籍以外のスタッフが日本に来ることもあります（2011春からは東日本大震災の復興支援に彼らも来日）。数年前、アーユスが関わりを持っている、「日本イラク医療支援ネットワーク（代表は医師の鎌田實氏）」の現地スタッフであるイブラヒムさんが来日した折、私の寺に、ほんの数時間立ち寄ってもらい、法話会に集まった門信徒の皆さんとお話をしたり、お茶を飲んだりして過ごしました。

想像もしていませんでしたが、こうした関わりがあると、朝鮮半島で災害が起きたとき、あのキムさんは、元気だろうかとか、中東で事件が起きたとき、あのイブラヒムさんは巻き込まれていないだろうかという意識が生まれます。それまでニュースで、客観的な出来事と見ていた時とは随分違います。

実は、ボランティアや、その他の支援活動でも、支えることは、気づかずに私たちの意識の深いところで確かめられる、重層的な生き方を恵まれることでもあるのだと経験的に実感します。

以前、ラジオで、台湾の大地震のニュースの報道を聞いていたとき、世界から集まった報道陣が、現地の台湾の人々から道を教えてもらったり、取材の手伝いをしてもらったりしていたことを知りました。アナウンサーは、その場を借りて、「現地のみなさん、本当にありがとうございました」とお礼を言っていました。

私は、これを聞きながら、「ああ、本当にそうだったなあ」と気づかされました。私たちは、物事を受け止めるとき、躊躇（ちゅうちょ）なく、一般的で常識的な、そしてそれは表層的なものの見方をします。そして、その見方で、目の前のものを決めつけますが、そのとき、実は相手の本当の姿を見逃し、さらに真の姿を無視しているようです。

被災者は、いつでも、どこでも、どんな状況でも、助けられる側の立場だという見方もあります。無論、被災者に対して十分な援助をしなければならないのはいうまでもありません。しかし、仏教の教えを拠（よ）り所にする人生態度に生きるならば、上の立場から「してやる」のではなく、お互い縁起という関係を基にしている、つまり、させていただいているのです。

当たり前のことですが、被災者も、実は共に社会に貢献し合っていけるのです。ボランティアをしたことがある人は実感されることでしょうが、癒されるのは、される立場ばかりでなく、する側も「お役に立っている」と自分が癒されるのです。築地本願寺の職員や、防犯ブザー配布を考えた人や、NGOに関わる人と同じように、お互いさま、おかげさまと、支えられていく水平のいのちの関係を生きたいと思いました。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後六時半の法話会「ナムの会」で『正信念仏偈』を、第三日曜午後六時半の「聖典勉強会」で『親鸞聖人御消息集』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と八月は休会し、十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります。「聖典勉強会」は八月と十二月は休会し、その他、行事によって休会があります。

いのちは誰のものか
～業報の自覚

●だけど僕らはくじけない　泣くのはいやだ笑っちゃお♪

井上ひさしさんのお芝居を初めて見たのは、1964年にテレビ放映された『ひょっこりひょうたん島』でした。小学一年生の私は、作家の名前は知りませんでした。しかし学生時代、井上さんの『ブンとフン』や『モッキンポット師の後始末』などを読んで、その名前を知るようになります。

その後、井上さんの名前と巡り合ったのは、私が「念仏者・九条の会」（2005年発足）の会員となった頃、「九条の会」（2004年発足）の呼びかけ人の一人として活躍されていたので、またここでもお会いしたという思いが生まれました。

2011年8月、故・井上さんの『父と暮らせば』の舞台を新宿で見ました。原爆の後、広島市内で父と暮らす年頃の娘の独り語り（モノローグ）、あるいは、父との対話（ダイアローグ）という形式の芝居です（いったいどっちなのかと気になる方はぜひ、原作をお読み下さい）。非戦や平和を訴えるときに、剛速球で勝負する作家もいますが、井上さんは、切れ味の鋭い変化球で勝負します。

戦争など不条理な出来事に遭遇し、そしてその時、親しい人が命を落としたり、あるいは人が人を傷つけたりした時、残された人にとても胸苦しい思いが重く重く襲います。

もちろん、他人によってひどい目に遭ったという被害者意識も起きるかもしれません。しかし、一方で私たちは、なぜあの時、私はあんなことをしたのだろう、どうして、よりによって私は、それに巡り合ってしまったんだろう、と自分のあり方を問い悩みます。

もし自分のあり方がほんの少しでも違っていたら、そのことを回避できていたかもしれない、その場に関わらなかったかもしれない、というやるせない気持ちが生まれ、何かを納得しようとし、立ち上がろうとします。

●運命か、神の御心か、それとも業報の自覚……

思い通りにならないことが起きた時、これは偶然そうなったのだから、理由などを考えても仕方ない、「ケセラセラ（なるようになるさ）」と受け止められれば、偶然論といえるでしょう。

しかしそうは受け止められない、何かこれには理由（わけ）があったのだ、そうなる必然の結果だったのでないかと受け止めようとすれば、その理由を考え、納得しようとします。これを必然論といいます。それを仏教を生きようとする立場から分類してみました。

まず、これは運命だという受け止め方です。人生の背後には、運命を司るのようなものが働いていて、人生のすべてはその作用によって左右されているという考えです。説明のつかないものを運命と呼ぶのも、定まったようにクルクル巡るという運という字を使った訳です。ただし、その決定力が強いと考えれば宿命などと諦めざるを得ませんが、その支配力が流動的だと考えれば運を開くなどと受け止めることがあります。

次に、人生や自然の背後には、神のような超越者の意志や威力があり、それが私達の生活を支配し左右していると考える受け止め方です。日本には八百万の神様が役割分担をしているという神道があり、諸民族にも同じ様な宗教観があります。また、キリスト教やイスラームなどの一神教にも、人間の歴史は神の深い配慮で起きていると考える宗教観があり、といいます。運命論と同様、神の力が強い時には運を天に任せるといい、余裕がありそうな場合は運を変えようとお願い事（祈願）をするという選択も生まれます。

「『神は人間の手を借りて人間の悪行を処罰もする』として第二次大戦時のドイツ・ドレスデンへの空襲と、広島・長崎への原爆投下を挙げ、『これらは神の懲罰であり、人間の復讐だった』『ドレスデンはナチに虐殺されたユダヤ人の復讐だった。広島・長崎は日本の軍国主義の犠牲になったアジア人の復讐だった。特に、七三一部隊の生体実験に動員されたマルタの復讐だった』」と韓国の中央日報で報じられた考えは神意論の一つの展開でしょう（朝日新聞デジタル、2013年5月23日）。

しかし、あの時、もしああしておけばこうならなかったのに、あるいは、ああすることができなかったからこうなったのだ、と自分の行為と結果に関係を持たせて、人生の諸現象を見る受け止め方があります。このように人生の出来事は、自分、そして自分の関わる社会の行為に因果関係と責任があるという考え方を、仏教は論と示します。

私の生き方と、人生の出来事をどう関連づけ、納得し、しかも、社会全体の幸福につなげるかということです。つめて言えば、原爆投下にも、私の責任を問う生き方です。しかし、それは人に向けて、こう考えろとか、あなたのせいだと責めることではありません。

この業報論は、人生の苦難に対して、自分の生き方を関わらせるから、人生の出来事を、これは自分の責任でこうなったと受け止め、受容し納得する態度が生まれると同時に、人間の理性によって解決できる可能性のあるものに対しては、どこまでも人間と社会の矛盾を摘発し変革しようとする仏教的な人生態度が生まれます。

●いのちは誰のものか～私への問い

釈迦族の皇太子であるシッダールタ、後のお釈迦様にはというがいました。幼い頃、二人は森へ遊びに行くと白鳥が飛んでいるのを見て、提婆は自分の弓矢で射落としました。シッダールタが先に見つけ、傷ついた白鳥を胸に抱えます。すると、自分が射たから自分のものだと提婆が主張します。いや、先に見つけて抱いたから自分のものだとシッダールタも返しません。城へ帰り、長老たちに尋ねるとしの言葉を教えられます。

> 「すべてのいのちは、それを愛そう、愛そうとしている者のものであって、それを傷つけよう、傷つけようとしている者のものではない」淳『いのちは誰のものか』（樹心社より）

いのちを奪い取り傷つけ殺そうとしている者と、傷を治し生かしてくしもうとしている者とは誰でしょうか。実は他ならぬ私の中にもある二面性かもしれません。

不条理で、重い問題に直面し、私のいのちをどう生きようとするのかと見つめる時に、どうせ、死ぬのだから仕方ないといって提婆のように自分の思いのままに生きるのか、それとも、これはかけがえない、一度きりのいのちであり、それを見つめつつ私が責任を引き受けて生きていこうとするのか、つねに仏教は私に問いを投げかけてくれるように思います。憲法を変え戦争のできる国にしようという今、仏の願いを確かめたいと思いました。

被災者は、いつでも、どこでも、どんな状況でも、助けられる側の立場だという見方もあります。無論、被災者に対して十分な援助をしなければならないのはいうまでもありません。しかし、仏教の教えを拠り所にする人生態度に生きるならば、上の立場から「してやる」のではなく、お互い縁起という関係を基にしている、つまり、させていただいているのです。

当たり前のことですが、被災者も、実は共に社会に貢献し合っていけるのです。ボランティアをしたことがある人は実感されることでしょうが、癒されるのは、される立場ばかりでなく、する側も「お役に立っている」と自分が癒されるのです。築地本願寺の職員や、防犯ブザー配布を考えた人や、NGOに関わる人と同じように、お互いさま、おかげさまと、支えられていく水平のいのちの関係を生きたいと思いました。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後六時半の法話会「ナムの会」で『正信念仏偈』を、第三日曜午後六時半の「聖典勉強会」で『親鸞聖人御消息集』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と八月は休会し、十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります。「聖典勉強会」は八月と十二月は休会し、その他、行事によって休会があります。

あなたの知らないあなた
～仮面（ペルソナ）、それとも本質

●実は、奥様は、魔女だったのです？

クラーク・ケントさんが、長年、いやほんとに長年勤めてきたデイリー・プラネット紙の記者をやめたのをご存じでしたか？　2012年10月24日、アメリカで発売されたコミック誌上で、「新聞がジャーナリズムではなく、エンターテインメントになっている」とケントさんは、同僚の前で抗議し、辞職したのです。

デイリー・プラネット紙の記者、クラーク・ケントさんこと、実は、あのスーパーマンといえば、誰でも分かりますよね。『スーパーマン』はコミックブックとして、1938年初出の作品ですから、彼は、もう70年以上、同じ会社に勤めていたことになります。

さて、「○○（誰それ）こと、実は、●●（誰それ）」というのは、洋の東西を問わず、時代の久近（くごん）（遠い昔も、最近の今でも）をいわず、多くの人が魅力を感じる物語の設定です。テレビドラマの『奥様は魔女』の「ごく普通の二人は、ごく普通の恋をし、ごく普通の結婚をしました。でも、ただひとつ違っていたのは……奥さまは魔女だったのです」なんていうオープニング・ナレーションも、心をくすぐりました。

ところが、一方で私たちは、衝撃的な事件が起きると、「あんなことをする人だとは、思わなかった」とか、「そんな人だとは、思わなかった」と、よく言います。テレビではニュースなどの報道番組のなかで、こうしたインタビューを、これ見よがしに流しています。もちろん、これは、「そのように、思い違いをしていた自分」とか、「見たて違いをしていた浅い見方の自分」ということを、まったく問題にしていないという側面がありますが、私たちは、人を見るのに一つの側面だけから決めつけ、あるいは、人間とはそのようなもの、つまり、裏の側面などないものだと見ることを、日常的には、善いことだと思っているのかもしれません。

しかしながら、前述のごとく、人間には二面性があることや、そのような人間性に魅力を感じたり、そういう重層的な人間の側面に関心をもっているのも、私たちの偽らざる傾向のような気がします。もしかすると、人間には、外から見えない、違う側面があるということを、どこかで確認したい、知ってほしいということでしょうか。

●照らされて知る

照育（しょういく）という言葉を学んだことがあります。

仏教、つまり仏さまの教えは、「その智慧は私たちの迷いの闇を照らし破る」という働きがあり、また、「その慈悲は自我の都合の殻の中に閉じこもろうとする私たちのいのちを脱皮させて、育て上げる」という意味だから、照育だというわけです。

仏さまの目覚めを目指す仏教を学び、その教えを日々の暮らしの中で実践していくところに、その道を歩む人には、自分の愚かさや間違いを知らされる実感を、照らされていると表現したのではないでしょうか。

また、さまざまな人生の困難な出来事を超えられず、悩み、苦しみ、あえいでいた自分が、教えを学び、実践することで、今まで超えられなかった問題を少しずつでも超えていけるような確かな「いのち」の足腰を育てられているな、と表現したのではないでしょうか。

こうして、今まで見えていなかったこと、気付かなかったことが照らされると、今日まで自分がどのような生き方をしていたかが見え、知れてきます。

教えに出遇うということは、たとえていえば、鏡に照らされることです。鏡に照らされて知る自分とは、それはどんな人格者であろうと、決して、清く、美しく、立派なものではありません。思い上がった自分であり、多くの恩恵をいただきながら、それを忘れた自分です。むしろ、人には知られたくない自分が見えてきます。自分の棺桶のふたを閉ざすまで、これだけは人には言えないことがあるなあと、見えてくる、知れてくる、実感してくるということです。

そうして、自分の姿を照らされることと、まったく一緒になって、今まで見えなかったけれども、自分を支え、包んでいてくれているこの世の事実、大きな恵み、仏道を歩んだ先人が身をもって教えてくれている真実に目が開き、それによって新しい仏教的な人格主体が育てられるのです。「私の中に、私が照らされて」育てられるのです。仏教を求め、仏教に生き、仏教的な人生態度を得た実感のことを先人は、照らされて「おはずかしい」と言い、育てられて「おかげさま」と言ってきたわけです。

●二面性を持つ人間だから～ウッディ・アレン『ローマでアモーレ』

ウッディ・アレン監督のコメディ映画『ローマでアモーレ』（2012年）には、憎めない人物たちが、大勢登場します。映画は、いくつかの人間模様が並列して別々に描かれながら、それぞれの話が印象深く心に残ります。

伴侶がいながらも、あるいは、人生の目標や理念を掲げながらも、登場人物たちは気の迷いから、ちょっと道をそれたものに心を奪われてしまいます。彼らの姿に、見ている自分も重なってしまうから、笑いながらもうなずいてしまいます。

その中で、画面には見えているけれども、そこにはいない、「功成り名を遂（こうなな）げた」国際的に活躍する建築家が、まるで狂言方（プロンプター）（舞台の陰にいて、役者がせりふをまちがえたり、つかえたりしたときに小声で教える人）のように登場して、一人の若者にだけ向かって、教訓めいたことをつぶやきます。映画の終盤で、彼は、自分と同じように建築を志すその若者に、「大型商業施設（ショッピングモール）の設計で、たくさんのお金が手に入る人生もいいものだよ」と、仕立ての良い麻のジャケット姿で語ります。すると、若者は、さらりと厭味（いやみ）のない笑顔で、「魂を売ったね」と一言（ひとこと）いいます。

その言葉を受けて、建築家は、大人の表情で、それは悔いでもなく、言い訳するでもなく、また、居直りでもなく、何か深いものを残して、立ち去っていきます。

私は、他の登場人物たちも、どこか憎めなくて、好きになってしまいました。それは、なぜでしょうか。きっと、彼らは、実は私の分身に見えたからではないかと思います。そして、優れた作品というのは、多くの人たちに、登場人物と自分を重ねていくような内容になっているようです。つまり、こういう二面性を持っている人間の姿こそ、実は私のことではないだろうかという思いを育てるものだと思います。さて、映画を振り返ると、どの登場人物たちも、若かった頃の私であり、今の私であるとうなずけてきます。私はこれからどのように生きていこうとしているのかということを、いつの間にか映画からも、学んでいくことが出来そうです。

「魂を売る」ような私がいながら、それでも私は、確かに自分を照らされ、育てられて生きていこうとしている。あなたも、私も、人間の二面性に深く気づくことを通して、いのちが、脱皮し、成長しているように思えてきます。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後六時半の法話会「ナムの会」で『正信念仏偈』を、第三日曜午後六時半の「聖典勉強会」で『親鸞聖人御消息集』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と八月は休会し、十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります。「聖典勉強会」は八月と十二月は休会し、その他、行事によって休会があります。

歴史が繰り返すか、
それとも、迷いの私が歴史を繰り返し作るのか

●「私は、私のようなものを会員に入れるような倶楽部には、入りたくない」

　これは、グルーチョ・マルクス（1890ー1977）のジョークです（マルクス兄弟の一人。アメリカのコメディアン）。自分をよく見て語っているようで、そうできない自分の姿が見えてくるので、人を責めたり傷つけたりするものではない、自分の愚かさに気づかされる笑いが生まれます。
　アジアの歴史認識が関心を持たれ、平和憲法から戦争憲法へ改憲の危機が言われる今、
「戦争をしたい人はいません」
　という言葉は、グルーチョのジョークと同じくらい、皮肉っぽくて、笑いを引き出すものもないように思えます。この言葉は、いかにも真っ当な発言のように思えますが、自分の抱える姿を相対化していない人の発想であり、その発言だと思います。
　今年もいろいろな事件（佐世保高校生殺人事件、幼児誘拐殺傷事件など）や政治的な発言（「産めないのか」という東京都議会でのヤジ、国会周辺デモ規制発言など）がありましたが、それらは、民主的にお互いを尊重することを忘れ、暴力的に相手を屈服させ、支配しようとする発想が根深いものであることを教えられます。なぜかといえば、私たちは、相手の存在を否定してまで、自分の主張を認めさせようという心があることを教えられるからです。
　不遜（ふそん）だけれども謙虚な印象が残る、グルーチョの言葉がそれを教えてくれます。

「テレビほど、教育的なものはない。
　　誰かがテレビを付けると、私は隣の部屋に行って本を開く」

●「戦争をしたい人はいません」～その言葉は真（まこと）か?

　私自身がそうですが、生まれながらの自分は、自分の都合で考え、生きているとは気づかないようです。これが仏教でいう迷いの自我の姿です。
　あるお寺の掲示伝道の言葉に、
「生きたまま殺したのが、一番おいしい」
とありました。確かにその通りです。病気や寿命で死んだ魚や家畜を食べたいとは、なかなか思いません。「新鮮で美味いねえ」と言っている時には、「相手の存在を殺しても、自分のあり方や要求を認めさせたい」という自己中心的な姿は、全く忘れています。
　同じように「戦争をしたい人はいません」と言われると、私たちは自己中心の自分を見たくない癖があるものですから、「戦争をしたい人がいること」を忘れてしまいます。
　養老孟司さんは、「戦争で懲りた人も、懲りてなんかいない人も、敗戦で儲けた人も、損した人もいる」（『小説を読みながら考えた』双葉社、2007）と言います。その指摘の通り、教育基本法を変え、改憲手続法（国民投票法）を作った人びとがいた訳ですし、今、「平和を求める憲法」の根幹を変えて「戦争ができる憲法」にしようとする人びとがいます（同じ首相の時です）。しかも、憲法を変えるのは主権者であるはずなのに、現憲法を守るべき義務のある国会議員が中心となって声高に主張しています。

●歴史から学ばない姿

　ブリュッセル大学歴史学のアンヌ・モレリさんは、『戦争プロパガンダ　10の法則』（草思社、2002）で、戦争開始国政府がメディアと結託して流した嘘を分析しています。
　歴史の中で繰り返された情報操作の方法や、正義が捏造される課程、そして国民を騙してきた政治的発言を以下のように浮き彫りにしています。以下、私がまとめました。

第1章「われわれは戦争をしたくはない」
　自分の姿を見つめない立場で自らを正当化し、政府は戦争を始めます。第1章の題は、少なくとも近代の国家元首が、戦争を始める直前、または宣戦布告の前に必ず言う言葉です。改憲を叫ぶ政治家の発言を聞いているとこれだけでなく以下の内容も重なります。
第2章「しかし敵側が一方的に戦争を望んだ」
　1931年9月、旧満州で日本軍の謀略によって、昭和の十五年戦争が始まりました。一方、1941年12月、真珠湾攻撃も事前にアメリカ政府は情報を得て工作活動をしていた事実があります。どちらの国も、大恐慌の不安から脱却するという経済問題を解消するために嘘をついて戦争は始めました。
第3章「敵の指導者は悪魔のような人間だ」
　政府や軍部の情報操作で、簡単に人心は左右され、洗脳されてきたのが歴史の事実です。サリン事件のオウム真理教信者の実態を示した、森達也監督映画「A」を見ると悪魔とは誰かと考えます。敵も味方も人間なのに、ご縁次第で、戦争を始めたがる鬼にもなれば、平和的解決を求める仏にもなります。ところが、その鬼という言葉を相手に押しつけて「敵」と決めつけたのが、鬼畜米英というスローガンでした。鬼ですから、人の姿でも人ではありません。殺しても構わないという論理で人間を洗脳していくのです。
　お寺のお説教で、「犬の子はどれだけ育てても犬にしかならないが、人の子は鬼にもなれば仏にもなる。人として生まれた恐ろしさと喜びを知れ」と聞きました。
　悪魔と決めつけて、殺戮破壊の戦争を美化し、相手を殺すことを偉業と褒め立て、戦死者を誉める慰霊設備を予め用意しておきます。しかし、歴史に学んだ立場や仏教に育てられ目覚めた眼から見れば、そういう決めつけで戦争を始めるのは、まさに悪魔の仕業です。日本は、戦時中、相手を悪魔と決めつけた時、「百人斬り」「三光作戦」「花岡事件」「731部隊」など、自分が悪魔となっています。（以下の章は、省きます。）

　全権を政府に委任することと歴史に学ばないことは、自分の生き方を深く内省する仏教的人生態度と大きく離れていると思います。それでは、仏教的人生態度とは何かといえば、自己を正当化したり、相手を否定するのではなく、お釈迦様の言葉である「お互いが死すべき脆（もろ）いのちを生きているという深い自覚を基にしていく」ことだと思います。

「敵対し合うわれもかれも、いずれはやがては死すべきという「ことわり」を知る人々があれば、争いはしずまる。」（中村元『ブッダの真理のことば　感興のことば』岩波文庫より取意）

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後六時半の法話会「ナムの会」で『正信念仏偈』を、第三日曜午後六時半の「聖典勉強会」で『親鸞聖人御消息集』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と八月は休会し、十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります。「聖典勉強会」は八月と十二月は休会し、その他、行事によって休会があります。

情報操作は、どこで行われているか
～煩悩の凡夫、火宅の世界

●パンダか、圓正か?

1979年9月3日、名人と呼ばれた落語家の三遊亭圓正（えんしょう）さんが、亡くなられました。その翌日、日中友好条約批准の記念として、1972年に来日した上野動物園のパンダ、ランランが死にました。そのため、一般新聞の1面には、圓正さんの死亡記事より、パンダの死が大きく取り扱われました。そのことを私は、古今亭志ん朝さんの落語のマクラ（前フリ）で知りました（新聞によっては、動物の死なのに、「パンダが亡くなりました」と敬語を使っていたことが話題にもなりました）。志ん朝さんの口ぶりを真似して、お伝えすれば、

「ランランの大きな写真と共に、
上野のパンダ死ぬ、とございました。
ところが、その脇に、大変小さく、
圓正も死ぬ、と。
死ぬ日は選べませんからねぇ。」

ということだったか、と私の記憶に残ります。もちろん、「も」なんていう表現を新聞が使うはずもありませんが、マクラとしては心をしっかりとつかみますね。

この二つの死亡報道のことを、ふと思い出したのには、理由があります。それは、最近のニュース報道で、「あれっ?」と思ったことがあったからです。

●ニュースって、なんだろう?

2013年8月22日、午後7時からの二つのニュース番組をザッピングしていました。その日、たまたま見ていた、NHK総合『NHKニュース7』の冒頭のニュースは、「ニューヨークヤンキース・イチロー選手の日米通算4000本安打達成」に関する報道でした。その瞬間、ふだんからよく見ている、CS-TBS『ニュースバード』冒頭のニュースは、「福島原発からの放射能汚染された水漏れ事故」でした。

イチローなのか、放射能汚染水なのか。話題の視点は比べることはできないもので、それぞれ、かけがえのない大事な報道です。しかし、その日に起きことの中で「何をトップニュースとするか」という問題意識を、ふと考えました。それで、パンダと圓正を思い出したのです。

考えてみると、ニュース報道のランキングは、社会の関心と非常に深い関係があることでしょうが、もう少し別の言い方をすれば、その社会の政治的文化的な成熟度と無関係ではないと思います。

そこで、こうした問題意識とニュース報道は一体、何をもとにしているのだろうかと、調べましたところ、私の関心をひいた“国境なき記者団”の報道姿勢に、学ぶところが大きいと思い当たりました。

“国境なき記者団”は、『国境なき医師団』ほど知名度は高くないかもしれませんが、そのウェブサイトには次のように説明されています。

「言論の自由、報道の自由を擁護するために、1985年にパリで設立されたジャーナリストによる国際的な非政府組織。現在世界の主要国を中心に130の支部をかまえる。」
http://www.rsf.org/

この団体は、世界179の国や地域の「報道の自由度」ランキングを発表しています。1位・フィンランド、2位・オランダ……ワースト2は北朝鮮とエリトリアで、日本は前年（2010年）の22位から大きく順位を落として53位で、韓国の50位を下回っています。

日本の順位が落ちた理由について、同団体は、東京電力福島第一原発の事故に関する情報が「透明性に欠け、個別取材に対する配慮がほとんどなかった」ことと、記者クラブ再編の失敗を指摘しており、「この急激なランクダウンは警告である」と発表しています。結果はNHKなどで報じられ、いろいろな反応がありましたが、注目されるのは、報道の基準として、

1　権力が介入しているか
2　原論の自由を尊重しているか

ということです。ジャーナリストの哲野イサク氏は自らのウェブサイトで次のように語ります。

「国境なき記者団は、『報道の自由』を国家権力の介入の観点と共に、その社会がいかに言論の自由を尊重しているかの両方の観点から見ていることだ」

●自力か、他力～仏の「いのち」を歩む

同じ出来事を受けとめるのに、表現が違うとずいぶんと異なる受けとめ方、そして、生き方が生まれるということを教えられます。

昨年（2013年）に観た、映画『終戦のエンペラー』は、その原題（英語）は、ただ『Emperor』でした。終戦という言葉から、私はふと、敗戦という表現を思い起こしました。

この「敗戦」という言葉をめぐって、政治学者の白井聡さんによる『永続敗戦論』という、たいへん興味深い論議があります。詳しく紹介できませんが、朝日新聞などで取り上げられていました。

ところで、先のイチロー選手が4000本安打を達成した日のインタビューで、「4000のヒットを打つには、8000の悔しい思いをしてきた」と答えていました。

私の授業を数年前に聞き、今では社会人となっている30歳のある青年がこれについて、

「あ、自力と他力の関係性って、まさにこういうことなのかもしれないな」と思ったといいます。つまり、

4000 ≒ 自力 ≒ 目覚めた（強さ）
自分に都合のよい方にばかり普通は目がいきがちであり、それを素晴らしいことと考え、それだけを追い求めがちですけれども、
8000 ≒ 他力 ≒ 目覚めさせてもらった（弱さ）
同じ出来事を成り立たせている、もう一方の側面を認め、受け入れることで、強さと弱さとは不可分であり、表裏一体であったことに気がつく

と語ってくれました。

いつの間にか、教えられる自分を忘れていたことにも、気づかせてくれました。

生まれながらの我愛（自己中心性＝無明（むみょう））を抱える私たちは、もう一方の側面を認めたり、受け容れる素地を忘れて生活しがちですが、仏法という道理の教えを学び、それぞれの宗派の仏道を行ずるということは、道理に目覚めた新しい「いのち」、仏の「いのち」を恵まれて、私と社会を見つめる歩みが始まっていることだと深くうなずきました。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後六時半の法話会「ナムの会」で『正信念仏偈』を、第三日曜午後六時半の「聖典勉強会」で『親鸞聖人御消息集』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と八月は休会し、十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります。「聖典勉強会」は八月と十二月は休会し、その他、行事によって休会があります。

みんな違ってみんないい？

●みんな違ってみんないい

大正末期から昭和初期にかけて活躍した、童謡詩人の金子みすゞさん（1903～30）がブームとなってから、もうずいぶんと年数が過ぎました。

金子みすゞさんの詩は、詩人の矢崎節夫さんの努力により、全集や選集が1984年にJULA出版局から次々と出版されたことが契機となり、1990年代には多くのマスメディアなどに取り上げられたように思われます。また、2011年、東日本大震災の直後、ACジャパンの広告で、「こだまでしょうか」という金子みすゞさんの詩が、20年前のブームを知らない世代にも、その名前を印象づけたように思います。

ここでは金子みすゞさんの生涯や文学論には立ち入ることはありませんが、「わたしと小鳥とすずと」の最後に出てくるフレーズである“みんなちがってみんないい”ということばを通して考えたいことがあります。

社会は、ある一定の価値観をもとに成り立っている側面があります。

例えば、効率性が悪いことよりもいいことを、合理性が低いことよりも高いことを重視したがります。それは、卑近な言い方でいえば、経済効果が低いことよりも高いことを、生産能力が劣ることよりも勝ることを、よりよい価値観として、私たちは暫定的に取り決めをしています。

しかし、生きていくという事実には、さまざまな側面で、そうした効率性や合理性、また、経済効果や生産能力で決めつけられない、お互いのいのちを「かけがえがない」と見つめる個別の出来事があります。そのため、この「わたしと小鳥とすずと」の詩は、私たちに迫ってくるものがあります。だから、“みんなちがってみんないい”というフレーズは、お互いを納得させるのかもしれません。

でも、本当に私たちはお互いに、それを納得しているのでしょうか。いや、もしかしたら、そう納得した態度をとれば、周りの人と少しうなずき合っているように振る舞うことができるという安全圏に身を置いているだけなのではないでしょうか。

●オリンピックは招致で承知？

2013年9月7日（現地時間）、アルゼンチンのブエノスアイレスで開かれたIOC総会で、2020年東京オリンピック・パラリンピックの開催が決定しました。

安倍首相の「福島の原発事故は完全にコントロールされている」という演説が功を奏したのかどうかは私には分かりません。分かっているのは、招致が決まったという事実があることと、ほとんどのマスメディアが横並びでそのことに手放しで賛意を示し、あるいは浮かれた言葉を発する番組などが作られたということです。当然のことながら、テレビ東京など、一部のメディアには無関心な対応をするところももちろんありました。

2013年9月12日付の朝日新聞デジタルでは、オリンピック誘致を論じている過程では、「防災の街づくりを」「被災地の復興に意識を」と、幅広い賛否の声があったことを報じていました。また、開催決定後、「日本人なら立場に関係なく祝うべきだ」「喜んでないのは非国民」という書き込みがネット上に目立っているそうです。

同じ記事には「東京都は9月11日、猪瀬直樹知事（当時）をトップに都局長ら33人でつくる『五輪実施準備会議』を設置した」とありました。

私は、積極的にオリンピック誘致に賛同する者ではありません。

経済効果ばかりが謳（うた）われるオリンピックよりも先に、いまだにまったく手のついていない地域もある東日本大震災からの復興や、都民の福祉などに目を向けるべきだと考えます。また、世の中には異なる考えをする人が、同じ世界に生きているということに気づいて、お互いを認め合える社会を求めたいと思います。ですから、その「準備会議」には、東京オリンピック開催の前日まで、誘致を反対する人びとの意見が認められるような議論や広報がされる予算がつくことを願っています。

●すべてを同じように輝かせたい願い

『無量寿経（むりょうじゅきょう）』には、阿弥陀如来の願いが説かれています。それは、もともと釈尊の「さとり」の内容である、宇宙・世界を貫く根本原理が、私たち迷いの人間に向けて願いかけられているという表現となったものです。

その本願は四十八通りに説かれますが、第一願から第十一願までは、人類と世界のあるべき姿について計画して、誓ったものとして示されています。

先ず、第一と第二の願には、迷いの人間のあるべき理想像が説かれます。それは、地獄（争い）・餓鬼（貪り）・畜生（愚痴）という私たちの煩悩を取り除き、再び、そのような迷いのあり方に戻らせないことを誓っています。

さらに、第三と第四の願には、不平等な社会のあるべき理想像が説かれます。それは、民族や肌の色による人種差別、貧富による人間差別をなくし、人格人間存在の価値や意味をめぐる格差と差別をなくすことを誓っています。

とくに、第三願はその内容から「悉皆金色（しっかいこんじき）の願」と呼ばれます。その仏の国に生まれれば人々は皆、同じように金色に輝くようになるという願いです。

また、第四願はその内容から「無有好醜（むうこうしゅ）」の願と呼ばれています。その理想の国には美醜、貴賤の差別はなく、すべてが平等になるという願いです。

つまりこの第三と第四の願は、私たちの現実の人類社会の理想的なあり方について願ったものです。

経典はそれが成立し、編集された地方の社会の課題や状況を反映しています。つまり、そのころ社会にはさまざまな差別によって悩む人びとや苦しむ社会があったと考えられます。それは、好いとか悪いとか、美しいとか醜いとかということによって生まれる差別の無くなった世界をつくろうとする願いとなったのでしょう。いずれも社会の平等性を誓った願です。

現代に生きる私も、迷いの人びとを救って仏に成らせ、また、それによってまことの社会を形成させたいという如来さまの願いに生きたいと思います。その時に、本当の意味で“みんなちがってみんないい”という言葉が心にしみこんできます。そして、それは「お前は、なんと浅い意味で受け止めているのではないか」とも聞こえてきます。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳（本多 靜芳）

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後六時半の法話会「ナムの会」で『正信念仏偈』を、第三日曜午後六時半の「聖典勉強会」で『親鸞聖人御消息集』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます（会費はいずれも資料・茶菓代として千円です）。
「ナムの会」は一月と八月は休会し、十二月だけは鍋の会となるので出欠を取ります。「聖典勉強会」は八月と十二月は休会し、その他、行事によって休会があります。